



松下ヤイ子さん
(草野字本町)



「までい」といえば、一番は着る物のことを思い出します。
私は大正12年生まれで、若い頃は戦争も経験し、とにかく物が無い時代でした。
反物一反満足に買えない時代、私の家では農家だったので、米を川俣町まで背負って行って売り、反物と交換してきたりしていました。

それだけ着る物が無い時代ですから、当然着替えもなく、毎日同じ着物を着て、破れたらそこを継いで着ていました。よく膝やお尻が破けるんですよ。着替えがないので洗濯も週1回、日曜日に洗って、また月曜日から学校へ着ていったものです（笑）。さらに、古くなった着物は一度ほどいて（生地の状態にして）あまり日に当らず比較的汚れの少ない内側を、今度は外側に縫い直して、破れたところは継いで「までい」に着たものです。また、亡くなった人がいると、その人の着物を近所の方で分け合ったりして、とにかく隣近所で「までい」に生地は使っていました。

私も今はたんすにいっぱい着る物があって「贅沢になったかな」と思っています。村ではまでいライフを進めるそうですが、時代が1周したのかなと感じています。

前回までに何回か「ジェンダー」について考えてきましたが、いかがだったでしょうか？「自分は今の生活に満足しているから考えたくない」と思っている方も多いことでしょう。しかし、ジェンダーにしばらくしたものの方や心無い一言で苦しんでいる人が身近にいるかもしれません。もう一度立ち止まって自分の言葉を振り返ってみましょう。ジェンダーフリーな社会を目指すためには、そうあなたの思いやりが必要なのです。

こんなところにもジェンダーが潜んでいる…
「メディアのジェンダー」
マス・メディアが描く女性像・男性像には、性別や偏りが意外に多くあります。例えば、
○ドラマなどで、「男性は仕事、女性は家事・育児・介護」という性別役割分業が当たり前のようになっています。

○番組などの司会では、男性がメインで女性がサブです。

○女性の場合のみ、「女性く」「女く」「女流く」とつけます。（女社長、女医など）

○「女にしては」「女だから」「男まさり」など、女性が男性よりも下にあることを前提とした表現が使われたりします。

○若さや性的魅力だけが女性の価値であるかのような表現がされたりします。

○女性についての、容姿や配偶者の有無などを取り上げます。

毎日見ているテレビですが、私たちは何も疑問を感じたりはしません。でもよく考えてみると「おや？変だな」と思うことが意外に多いのも事実です。

ジェンダーに敏感になり、一人一人が人間らしく、自分らしく生きられるように小さな一歩から始めてみませんか。